

ニューズレター第八号

ドイツ現代史研究会ニューズレター第8号（2007年9月）

内容

- ・ 大野英二さんの思い出（上山安敏）
- ・ 2007年度研究会代表より挨拶（原田一美）
- ・ 2007年度事務局紹介
- ・ 会員の近著から（2006年7月～2007年8月）

大野英二さんの思い出 （上山安敏 京都大学名誉教授）

私がドイツ現代史研究会に参加したのは会が創立されてから暫く経ってからである。木谷勤、中村幹雄、末川清、山口定、野田宣雄、望田幸男さんたち文学部の西洋史、法学部の政治学の方々が中心になっておられたが、経済学部から大野英二さん、法学部から脇圭平さんらが推進役を引き受けられていた。大学紛争の頃はこの研究会がもっともアカデミックな雰囲気がしていたという記憶がある。その頃は、大野さんが熱心に出席されていたが、イニシアチブを取るというほどではなかった。しかし存在感は大きかった。それは大野さんが経済学部のなかで親しかった平井俊彦、田中真晴さんがルカーチやウェーバーなどの思想史の分野に傾注されていたのに対して、大野さんはドイツの資本主義の構造論に関心を寄せておられたことが大きい。当時ドイツの歴史学もフィッシャー論争の後コッカ、ヴェーラーらの「社会史」「社会構造史」が歴史のパラダイムを変えようとしており、日本の歴史学もマルクスとウェーバーを骨組みとしたドイツの「社会史」の影響力が強かった。ドイツ現代史研究会でも大野英二さんの『ドイツ資本主義論』『現代ドイツ社会史研究序説』に魅せられた者は私を含めて多かった。後に中村幹雄さんと奈良産業大学で一緒になって、毎週昼食を共にしていたが、中村さんの口から大野さんの名がしばしば挙げられ、私淑されていることが窺えた。ジェラシーを覚えたほどである。思想的には相当違っていると私

は思っていたのに、あれだけ敬服されたのには作品の持つ理論構成の大胆さと詰めの精密さにあったのだろうと思っている。大野さんはそうした点でドイツの伝統史学に異端であったケーア、ハルガルテン、H・ローゼンベルク、それに続くH・U・ヴェーラーの比較社会史の業績の偉大な伝道者であり続けた。大野さんはナチスは嫌いだったが、ドイツ人の徹底さは好きだった。それだけに時代の感覚にうまく乗っていく方法には厳しかった。

そうした大野さんがドイツ現代史や社会政策の分野と離れた世界に入ったとき、大野さんは相当悩まれたことと思う。法制史をやっていた私に他流試合を勧めてくれたのは大野さんであった。松田智雄先生の研究会に誘ってくれたのも大野さんであった。東京と京都と複雑な人脈を教えてくれた。ほかにもあったが、印象に残るのはリプロポートが行した雑誌『歴史と社会』の編集に推奨されたことだ。内田芳明さんが編集代表をされており、長幸男、松本三之介、宮崎犀一、中山茂と我々二人であった。1982年10月に創刊号に漕ぎ着けた。この雑誌は名前を見ても分かるように、ドイツのヴェーラー、コッカ、W・H・モムゼンたちを主な編集者とする季刊誌『歴史と社会——歴史的社会科学のための雑誌』（1975年創刊）を意識したものであった。大野さんの創刊にかける意気込みは並々ならぬものがあつた。創立の内情は私には分からないが、大野さんと内田芳明とは編集をめぐってじっくりいかなかった。

編集は人文科学から芸術・文学・自然科学までそれらを一つの香り高い学術総合雑誌の形で出すという難しい課題をもったものであったが、創刊号には大塚久雄と内田義彦の対談「社会科学の創造」、二号は丸山真男、芦津丈夫、脇圭平の鼎談「フルトヴェングラーをめぐって」を掲載することが出来た。二号の編集は松本三之介が当たられたが、丸山さんと鼎談した芦津さんは大野さんと音楽仲間であった。大野さんの音楽の造詣の深さは良く知られていた。芦津さんとの付き合いもそこからきている。その頃の大野さんは芸術に関心を広げられていた。渋谷のパルコが堤清二さんの若者文化を賑わしていた。我々も80年代の東京の新人類の現象に注目していた。帰る日程をずらして私と大野さんと中山茂さんとパルコでニーチェの「善悪の彼岸」を観に行った。ニーチェとルー・サロメとパウル・レーのあの三位一体説の場面、女性に拝跪するニーチェ、こういう文化映画はその後お目にかかったことがない。大野さんもニーチェとエロスに見入っていた。そういえば編集会議でも死生観、若者風俗論も話題になっていた。出版元がリプロポートであるせいもあつただろう。

ところが難しい問題も生じた。我々の『歴史と社会』の発行のときは「社会史」が新興の学問になった時期であった。1979年には『思想』も社会史特集をしており、『歴史と社会』と同じ年代に日本エディタースクールから阿部謹也、川田順造、二宮宏之、良知力らの編集で『社会史研究』が公刊されていた。歴史家と民族学者らの編集であるが、時代区

分的にいえば中世に重心がおかれていた。『歴史と社会』が現代ドイツ史とナチスの社会構造に力点を置いていた。大野さんはその中心的存在であった。雑誌の第三号は「1930年代の思想と社会」をテーマに大野さんが中心となって編集されている。ドイツ現代史から山口定、村瀬興雄、大林信二、末川清、清水多吉の諸氏の投稿を仰いでいる。

両誌ともいずれも「社会史」を標榜していた。だが『社会史研究』の方は二宮宏之たちのアナル学派の影響の強いカラーが出ている。J・ル＝ゴフの「歴史学と民族学の現在」が話題になっていた頃で、二宮さんが紹介されたJ・ル＝ゴフ、E・ル・ロワ＝ラデュリーたちアナル学派の第二世代の活躍がわが国の歴史学者の間に広い共鳴盤を獲得していた。それに同じJ・ル＝ゴフの「歴史人類学」「深層の歴史学」は山口昌男によって「実証主義及び社会経済史ボケしている日本の歴史研究者（特にそうした傾向の代表である講座「世界歴史」及び「日本歴史」の編集方針）」を批判する理論的支柱に使われた。だが山口昌男と内田芳明さんとは歴史の「周辺革命」「中心と周辺」の視点というトポスで息が合っていたのである。

それに「社会史」という語を日本の読者に実際に広めたのは阿部謹也さんであろう。ところが言うまでもなく同じドイツ史学でもコッカやヴェーラーたちの「社会史」「社会構造史」とは方法論的に違う。阿部さんは『ハーメルンの笛吹き男』『刑吏の社会史』以来中世の職人、伝説、民話の世界に入って歴史学と文学、民話の壁を取っ払ってしまった。それもハインペルに師事されている。それに戦後の社会科学の影響を受けた法制史でも顧みられなかったH・ブルンナーたちの古典的文献を活用されている。そういうと大野さんの作品とは対照的であると思われる。しかし大野さんは結構そうした傾向に注目されていた。私は大野さんの晩年の作品である『ナチズムと「ユダヤ人問題」』（リプロポート）『ナチ親衛隊知識人の肖像』（未来社）の手法はそれを現していると見ている。ナチスの内部の深層を窺うのに必要な資料の中に入っている。『ナチズムと「ユダヤ人問題」』を阿部謹也が新聞の書評欄に取り上げ、賞賛したのも中世の賤民とドイツのユダヤ人に対する共通の感覚があったからである。晩年はよき電話友達であった。こちらは無聊のときよく電話した。大抵は病状と世間話だったが。あの声が聞けなくなったことが寂しい。（2006年11月12日）

ご挨拶とお願い（2007 年度研究会代表より）

（原田一美 大阪産業大学教員）

前代表の丸島さんが、ドイツ現代史研究会に初めて参加したのは 1985 年夏のことだったと書いておられます（「ニューズレター第 7 号」）。そこで、私も少しドイツ現代史研究会の思い出話をすることにしましょう。

私の「研究会デビュー」（？）は、さらにその 10 年前、1974/75 年の冬のことでした。私は、当時まだ修士課程の 1 年で、明確に研究者をめざしているわけでもなかったのですが、大学院の先輩に誘われるままに、のこのこと出かけていったのです。そのときの報告者は野田宣雄先生で（内容は忘れてしまいました！）、会場は白雲荘の一番奥の狭い部屋、出席者も 10 人に満たず、大学院生は 2 人だけという本当にこじんまりとしたものでした。ただ、会の雰囲気は、私のような駆出しの者でも質問できるという非常にアット・ホームなものだったと記憶しています。その後、研究会には大野英二先生、上山安敏先生が参加されるようになり（上山先生も「大野先生の思い出」に書いておられます）、出席者も増えて広い部屋で行われるようになりましたので、私は、今となっては狭い部屋での研究会を体験した数少ない人間になってしまいました。

さて、4 月に代表になってから、何人かの方がたから退会のご連絡をいただきました。お一人（西井克己先生）はお亡くなりになり、お二人（末川清先生と野田宣雄先生）はご病気で出席できないからということでした。

研究会の草創期を中心になって支えてこられた先生方が退かれていくという事態に、「ひとつの時代が終わった」という感慨を抱くのは、私とその時代の空気をほんのわずかでも吸ったことがあるせいでしょうか。大野先生や上山先生が大学院たちとともに参加されるようになり、Winkler 氏や Wehler 氏などドイツ現代史の第一線で活躍する研究者たちの講演会が頻りに京都で行われ・・・今から振り返れば、本当にエネルギーに溢れていた時代でした。私は、大学院生としてこのような時代に参加できたことを幸運だったと思います。

とまあ、過去を振り返るのはこのあたりでやめましょう。ここからは、今年から始まる新しい試みについてのご報告とお願いです。会員の方はすでにご存じのように、今年度から雑誌（『ゲシヒテ』）を発行することになりました。発案者は新事務局長の田野大輔さんです。3 月末に行われた新事務局の打ち合わせのときに提案され、検討してみようということになったのですが、私は、正直言って、「えっ、そんなことできるのだろうか」と懐疑的でした。ただ、「この研究会には本当にお世話になったので、何か恩返しをしたい」という田野さんの熱意の前に、「足を引っ張ることだけはしないようにしよう」とは思っていました（上記のように、「恩返し」を考えなければならないのは、田野さんよりも私なのか

ら)。幸いなことに、新事務局の佐藤温子さんと高崎みずほさんも熱心に取り組んでくださって、また準備委員会に参加された村上宏昭さんと森本慶太さんのご協力もあって、あれよあれよという間に、来年 3 月末に創刊号の発行予定というところまでこぎ着けることができました。事務局 3 人と準備委員会の若い方たちが、雑誌創刊に向けたさまざまな準備作業を熱心に行ってらっしゃる様子を飛び交うメールから眺めていて、「ああ、まだこの研究会にはこのようなエネルギーがあったのだ」とうれしくなったのですが、いうまでもなく、雑誌の刊行を続けていくためには、会員の皆さまの協力が不可欠です。

歴史研究者（だけではありませんが）を取り巻く環境は、ドイツ現代史研究会の草創期に比べれば、はるかに過酷になっています。大学に職を得ている方たちは、雑用に追まられるばかりか、「自己評価」や「外部評価」という名の下に、いっそうの「業績」をあげるよう圧力を受けています。さらに、この「業績」志向は、これから職を得ようとする若い研究者にはいっそう厳しいものとなっています。上述したような研究会草創期のエネルギーは、当時はまだこのような外からのさまざまな圧力にさらされず、研究職にある方たちにも、大学院生にも一定の余裕があった（言い換えれば、のんびりしていた）からこそ、生まれたものと言えるのかもしれませんが。

ですから、当時のようなエネルギーを現在の研究会に求めるのは無理でしょうし、「協力する」ことがそれほど簡単なことではないことは十分に承知しています。でも、私の中では、「ひとつの時代が終わった」という感慨と同時に、他方で、今せつかく芽生え始めた「新しい時代の芽」（大げさでしょうか？）をなんとか大事に育てていきたいという思いも生まれています（田野さんたちの熱意に触れて、若い方たちのエネルギーを少し分けてもらったのかもしれませんが）。会員の皆さま一人一人に少しずつでもこのような思いをもっていたければ、全体として大きなエネルギーになるかもしれない——今はそのような期待を抱いています。どうかご協力をよろしくお願いいたします。

2007 年度事務局紹介

代表：原田 一美（大阪産業大学教員）

事務局長：田野 大輔（大阪経済大学人間科学部教員）

通信担当：佐藤 温子（大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程）

会計担当：高崎 みずほ（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

会員の近著から（2006年7月～2007年8月）

- ・飯田収治編著『西洋世界の歴史像を求めて』関西学院大学出版会（2006年7月）、第15章「ナチ強制収容所の『抑留者社会』——近年の研究動向によせて」
- ・飯田収治「戦争の記憶をたどる〈道〉——ナチ強制収容所をめぐるドイツ人社会の体験から」田中きく代・阿河雄二郎共編著『〈道〉と境界域森と海の社会史』昭和堂（2007年3月）
- ・飯田収治「ボーダーランドにおける民族の相克と共生——ドイツ第二帝政下のポーゼン州」、平成15年度～平成18年度科学研究費補助金研究報告書『西洋史の諸相における文化的ボーダーランドとマージナリティ』（研究代表者・田中きく代、2007年3月）
- ・小野清美「第三帝国におけるアウトバーン建設と『自然』——アルヴィン・ザイフェルトを中心に」、『名古屋大学法政論集』第217号（2007年4月）
- ・木谷勤「第1部 ヨーロッパ共同体の建設 第1章 前史——欧州統合の夢と現実」、「第2章 欧州統合の出発と現実」大矢吉之・古賀敬太・滝田豪編『EUと東アジア共同体——二つの地域統合』萌書房（2006年11月）
- ・田野大輔『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』名古屋大学出版会（2007年6月）
- ・仲正昌樹『日本とドイツ 二つの全体主義 「戦前思想」を書く』光文社新書（2006年7月）
- ・原田一美『『黒い汚辱』キャンペーン——『ナチズムと人種主義』考(2)』『大阪産業大学人間環境論集』6号（2007年6月）
- ・山口定『『後発国型近代化』概念の提唱』望田幸男編『近代日本とドイツ——比較と関係の歴史学』ミネルヴァ書房（2007年4月）
- ・葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」望田幸男編『近代日本とドイツ——比較と関係の歴史学』ミネルヴァ書房（2007年4月）
- ・望田幸男編『近代日本とドイツ——比較と関係の歴史学』ミネルヴァ書房（2007年4月）